

---

傷

yi yi

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

傷

### 【Nコード】

N7109Z

### 【作者名】

yiyi

### 【あらすじ】

とある学校に世間でいう2人の不良がいた。

二人は希望や将来の光も見えずただただ残り短い高校生活を送っていた。

ふとした事から学校の頂点を狙うことになるが、それは徐々に大きな問題となり、一つの事件をきっかけに男達の歯車は狂いはじめる。

人とは何か？生きるとは何か？

卒業までじっとしてられない男達は何を学び何を掴むのか？  
涙あり！笑いあり！青春ストーリーー参上！！

## スタートダッシュ

日本に居た時は、自分の力だけですべてをねじ伏せて来れた。だが、世界に出て見てさらに感じた。

「世界も小さい」と・・・

ここは日本のとある県の小さな町にあるごく平凡な公園。緑色の芝生で覆われている地面、真ん中には土管が3つ重なっている。

そこでは町の嫌われ者たちつまり不良が集まり、自分達の力を試し合っている。

その中でも極めて名を轟かせている2人の狂犬がいる。身近に居ながらも嫌われる存在からこう呼ばれている。

カラスとネズミ

カラスの本名は桐嶋拓、そしてネズミは富田龍二。

2人は高校入学日に殴り合いをし、その後は意気投合して今に至る。勝敗を気にかける者は居ず、残り一年半の高校生活を今まで通り過ごしている。

桐嶋拓は背が高く、モデルに向いているスタイルで、髪型はモヒカンと周りの目を気にしない個人主張が強い男である。

一方で、富田龍二は高校2年生の平均身長にしては低く、少し長髪 of 金髪で、物事を自分で解決し桐嶋拓とは正反対の口には出さないクール系である。

2人はいつも一緒に、どこに行っても2人のシルエットが見られる。喧嘩を売って来た奴等を殴り飛ばした後、2人はいつもの学校の屋上へと向かった。

太陽の光に照らされて暖かくなったコンクリートの上に横になり、2人は青空を眺めながら口にくわえた煙草を吸う。しばらく沈黙が続き龍二が口を開く。

「なあ・・・拓、例のアレ考えてくれた？」

拓はめんどくさそうに返事をした。

「ああ？なんだっけ？」

「あれだよ。この学校の頂点を取る話だよ。」

拓は短くなった煙草を投げ捨て龍二に背を向けた。

「嫌だつて言ってるんだろ！今時、学校の天辺取るうなんてダセエよ。」

龍二は前々から拓に学校で一番強い男になってほしかった。

「そんなに目指したいならお前がやれよ！」

「俺は拓よりも強くねえーから無理だよ」

「俺はそれが気に入らねえーんだよ！お前は俺に気を使ってるだろ？」

「何の事だよ？」

「実際、龍二・・・お前の方がつえーんだ！男ならありのままの自分見せるよ。」

龍二は立ち上がり、フェンスへゆっくりと歩き出した。

「俺たち不良は今の青春時代を何にも注ぐ事がねえーだろ？ましてやスポーツなんかしてないしよ」

龍二はグラウンドを眺めながら拓に問いかける。

「俺はマジで錆びれたガキだからよ。それは自覚してっから・・・」

拓、お前がやってくれ。」

「なんで俺なんだよ？」と拓は大声で言った。

龍二は振り返って微笑んだ。

「だつてお前は俺の相棒だろ？俺は見たいからよー見せてくれよ！ここから見る今よりも最高の景色を」

この言葉で拓は龍二と共に学校の頂点を狙うことになる。

だが、そうは言っても拓の通っている高校は別に不良学校ではない。どちらかというとき真面目で普通の生徒の方が多い。

それにこの時代根っからの悪はそういない。

やはり学校の天辺を取るうなんて考える奴はいないだろうと2人もうすうす思っていた。

「どうするよ？」

「俺に聞くな！お前が言ったんだろ」

「1年半通ってるけど、全然いねえな。まさか俺たちの学級にはいないんじゃない？」

「いや1人だけいるぜ」龍二は拓を見た。

「誰だよ？あ！？まさか・・・」拓は何かを思い出す。

「ああ、あいつだよ」

2人はすぐさま柔道部が練習する道場へと向かった。

「たゝのゝもゝ！！」拓は大声で叫びながら扉を開けた。

ガラガラ ドーン！！

その音に反応し練習中の部員全員が睨みつける。

「おーい！ゴリ居るかあ〜？」

「なんじゃ〜！！」遠くの方から一人の部員が飛ばされて拓達の足元で倒れた。

そしてのしのしと190cmは有ろう巨体が近づいて来る。

「よう・・・ゴリ、面貸せやー！」

「貴様等いい度胸じゃの〜」

ゴリ、本名は岡村剛

あだ名の由来は見た目。見た目がゴリラだからゴリただそれだけで、中学の時、龍二はゴリとライバルだった。

ほぼ毎日目が合えば喧嘩、喧嘩で傷は今よりも絶えなかった。だが高校で柔道部に入部し、ゴリは徐々に不良から遠ざかって行った。

今では大会で優勝するほど実力もあり、来年は部長候補らしい。

3人は道場裏の空き地に向かった。

「お前等わしになんか用か？」

拓は頭を掻きながら恥ずかしそうに言う。

「いや、実はよ急ぎよこの学校の天辺取ろうと思ってよ・・・相手してくれるか？」

ゴリはそれを聞いて即大声で笑う。

「ガハハハハッ！お、お前等そんな漫画みたいな事を・・・」

「だから嫌だったんだよ、こいつに言うの」

ゴリは笑うのを必死に止め、龍二達を見て言った。

「お前等バカだな。時間の無駄だと思わんのか？」

たしかにそう思うが言い返す言葉が見当たらず拓はゴリの足元に視線を移す。

そんな拓を助けるかのように龍二が口を開く。

「ゴリ・・・オメエも俺たちと変わんねーぞ」

「ああ？チビ象やるか？」

「いや、やるのは俺じゃねーよ」と言い龍二は拓の背中を軽く押した。

拓は龍二を驚いた目で見た。龍二は笑って拓を見て言った。

「テメエをぶっ倒すのは俺じゃね。最高の相棒だ」

拓も笑い、振り返りゴリを睨んだ。

拓はゴリ目かけて叫びながら走った。

「うおおおおー！！」

拓はゴリの脇腹に右蹴りする。

だが、ゴリの体は木のように硬く、右足は弾かれゴリは後ろに体重

をのせ

大きく握りしめた拳を振り下げた。

拓はとっさに腕で顔を守ったが、向かってくる拳は止まらず拓にぶち当たった。

拓は2 mほどぶっ飛び、そのまま立ち上がる事はなかった。

## 拓と龍二

龍二は倒れた拓を見ながら、その場に座り込んだ。

ゴリは拓の方へ近寄り、デカイ手で拓を持ち上げそして龍二に問いかけた。

「お前等はいつまでこんな事するつもりなんだ？」

龍二はゴリの問いかけに反応しなかった。

続けてゴリは口を開く。

「ま・・・俺とお前等は人生が違うからな、何しようが勝手だがよ・・・少しは大人になれ」

ゴリは拓を抱え、座り込んでいる龍二の横を通り過ぎる。

背を向けている龍二が小声で何か言う。

ゴリは聞き取れず「あ？」と聞き返す。

「大人になるには少し早えくだる。俺らにとっては好き勝手できないお前の方が可哀そうに見えるぜ」

ゴリはその言葉に何も返事をせず、拓を保健室へと連れて行った。

しばらくしてベッドの上で横になっている拓が目を覚ます。

傍には目を覚ますのを待っている龍二が椅子に座っている。

「あれ？もう夕方か？」

「ああ今5時23分だよ」

「そっか・・・」

しばらく沈黙が続く。夕焼けに響くカラスの声だけが聞こえる。

突然ドアが開いた。ガラガラ・・・

「もう大丈夫でしょ？早く帰りなさい」と女の先生が言う。

「ウィース」と軽く返事をして、二人はその場を去った。

足を引きずりながら拓は龍二の方を見て言った。

「なんかわりいな、いきなり負けちまってよ」

「謝んなよ」

「でもよ、あいつなんか強くなってるじゃないか？」

「ああ狙ってたってよ・・・プロの柔道家」

「マジかよ!？」拓は体の痛みを忘れるほど驚いた。

「ああ俺らとは生きる方向が違うんだろうな。俺あいつと中学が同じだから知ってたんだ。ゴりんちどちらかというと言えどよくオヤジさんがリストラされて親二人が仕事に出るもんで、あいつ妹の面倒をほぼ毎日見てたから好きな事出来なくてよ。自分はデカイ身体だから飯代とかめっちゃめっちゃかかるのを気にして、食事制限してたらしいけどその事が親にバレた時、泣かれたんだってよ」

「もっとたくさん美味しいごはん食べさせてやるからな」って

「その時、考えたんだってよ」

「考えたって何を？」

「自殺」

拓はその言葉を聞いた途端、歩く足を止めた。

「あいつ自分が居るから家族を泣かすからって家出よりも先にその二文字が思いついたんだって」

「ゴリってそんな事思う奴だったのかよ」

「身体がいくら大きくても心の大きさは変わらないんだろうな」

拓は下を向いて龍二に聞いた。

「それからどうなったんだよ？」

「それから頭はバカだからよ自分の身体を活かしたスポーツしかないって探して、相撲やプロレス、ボクシング、色々やった結果柔道

が自分に合うと思いはじめたってよ。逆に自分が親と妹に美味しいモノ食わせてやるって」

「俺そんな事さえも知らずに・・・」拓は自分の情けなさに腹が立ち舌打ちをした。

そんな拓に龍二は声をかける。

「でも、そんな事を俺らが知っても何も変わらねーよ。結局は俺らが知ってるゴリだろ？本当のあいつの事なんて誰にも分からないだろ？俺は拓、お前の事も俺はみんなが知ってる拓しか知らない。本当のお前を知ってる奴なんてこの世にいねえーだろ？」

「あーもうよく分からねーよ！！」拓は髪の毛を掻いた。

「とりあえずゴリは本気でオリンピックピック目指してるらしいぜ。でも、それでもあいつはまだ自由じゃねーんだよな。自分のためではなく、家族のために強くなってる。なのに目標があるあいつに俺はあんな事言っちゃまった」

「あんなこと？」

「俺は自分が生きている事を証明したいんだ！御託はいらない。ただこの拳で試したいんだ！だから拓、俺たちで何が出来るか探そうぜ。暴力しかない俺らだけど、暴力から何が発見できるかを」

龍二は笑顔で拓を見た。

「ああ・・・」と拓は言う。

たまに分からなくなる。

龍二、お前の言う通り、本当の龍二が俺には分からない。

辺りは暗く、いつの間にかカラスの声は聞こえなくなっていた。

3日後、朝から拓と龍二は学校内を暴れ回っていた。

「うはははは!!」

「もっとやっただれ〜タク〜!!」

「お前等なんだ・・・ぶっ」

拓の右ストレートが相手の顔面に当たる。

その日の昼、2人はいつもの屋上で時間を潰す。

「あ〜疲れた〜腕いてえ〜よ。なあ、龍二ちよつと焼きそばパン買って来てくれよ」

「あ?自分で行けよ!」

「チエツ、なんだよ冷たいなあ〜」

拓はコンビニで買った今週号の漫画雑誌を読みながら、ストローで紙パックのオレンジジュースを飲む。

龍二は目をつぶって、少し温い風を感じていた。

パラパラパラ・・・拓が漫画のページをめくる音が聞こえる。

沈黙という慣れた空気が続く。

「なあ龍二、後で三年の階に行こうぜ」

「一年はいいのかよ?」

「一年なんて眼中にねーよ。二年にはもう強い奴いないしな」

「ゴリは?」

「あいつは最後だ!三年にあいつよりも強い奴はいねえ〜だろ。ケリはちゃんとしてるぜ。それに俺達の名が広まれば一年の方から向かってくんだろ?」

「じゃあ〜行きますか」

「おう、やるからには本気でやるぞ!!」

その頃、屋上から2つ下の階にあるパソコン室では拓と龍二の暴走について3年生も集まっていた。

薄暗い部屋に4人各所に座っていて、そこにもう1人遅れてやってきた。

「わりいわりい遅れちまってよ・・・で、話して?」

「皆集まったか、話しは分かっているな?二年のバカ二人だ」

「桐嶋拓と富田龍二・・・この二人ですね」

「はい・・・あともう一人柔道部の巨漢も富田の仲間と思われます」

「あいつら調子に乗り過ぎたな」

「各自見つけ次第潰せ!」

そこに三年生の一人が慌ててやって来て「二年の奴らが三年のクラスで暴れてます」と息を切らせながら言った。

## 一週間

「お前等なんだ？」

「あいつら止めるー！！」

拓と龍二は向かってくる三年を殴りそして蹴りながら長い廊下を徐々に進んで行く。

バリーン 教室のガラスが割れる。

その音を聞いて状況も分からずに別の教室から出てきて廊下は人で溢れる。

先生の注意の声は誰の耳にも届かない。

女子は驚いて教室の端に逃げる子もいれば、その場で泣く子もいる。

そこに先程パソコン室にいた5人が暴れる拓達の前に現れる。

拓は振るう拳を止め、5人を見て笑った。

その場が一気に静まる。

バリバリバリ 5人の内1人がガラスを踏みながら拓に近づく。

拓はそいつを見てまた笑った。

「お前等何してんのか分かってんのか？」

「ああ・・・この3年ぶっ飛ばして天辺取るんだよ」

その言葉を聞き周りの人達は顔を見合わせる。

そして全員が大声で笑う。

拓は視線を変えずに目の前の男をじつと見つめた。

「お前らそんなくだらない事考えてんのか？」と笑いながら言った。

「くだらないかくだらなくないかは俺ら自身が決めんだ・・・笑いたければ笑え」

「あ・・・そう勝手にやっつけ、でもお前を潰すのは俺じゃない・・・この学校だ」

拓の後ろから騒ぎを駆けつけて校長が来る。

「じゃーなせいせいもがけ」と言っつて拓を殴ろうと拳を出すも拓は、簡単にそれを避けそいつの顔に軽くパンチした。

パンツ・・・

タラーっとな鼻血が出る。

「なんだ大したことないなあ・・・これなら一日で取れそうだ」隣にいた龍二はクスツと笑う。

「何やってるんだ！君たち！！」と校長が大声を出す。

「はい、はい俺達が悪いんで停学でも反省文書くとかなんでもしますよ」と拓は言い、その場を去ろうとすると鼻血を垂らした三年が校長に駆け寄る。

「これは俺達の問題でちよつと揉めただけで、ガラス代はちゃんと払いますんで」

「そ・・・そうかね、まあ喧嘩も程々にな」

「でも、校長・・・反省という意味でせめて一週間の停学は必要かと・・・」

「では君達は一週間の停学と課題をいくつか出すからちゃんとやるように！後で生活指導室に来るように」そう言っつてその場から校長は去って行った。

それに続き周りの生徒も自分達のクラスへと戻って行く。

「助けてくれなんて言っつてねーぞ」と拓は手をポケットに入れ、そ

いつに話した。

「あのままじゃ俺の気が収まらないんでね・・・」

「ふん・・・やる気になったって訳か」

「さっき言った通り一日で取ってみろよ！」

「もし出来なかったら？」

「その場合はお前等が何しようが一生関わらない。つまり天辺は卒業まで狙えないってことだ」

「ハ・・・面白いなそれ！それくらいの緊張感がないとな」

拓は龍二の方を向いて「意外と早くおめえの夢叶いそうだな」と言った。

「おゝそうだ！アンタの名前って何？」

「村田信二・・・」

「むらた・・・しんじ・・・か。一週間後な！」

「ああ、楽しみだな」

拓と龍二はその足で生活指導室へと向かった。

信二は廊下を歩く二人の背中を見て小声で呟く。

久々に燃え滾つちまったな・・・

一日

一週間後

拓と龍二は停学が解け、さっそく学校へ行った。  
正門の所には三年生二人が立っている。

「あなたたちから出迎えがあるとは、足を運ぶ手間が省けたな」  
「約束を忘れてないよな？」

「あつたりめーだ！こっちは暴れたくてウズウズしてんだよ」  
拓は指の骨をポキッポキッと鳴らせながら近づく。

もう一人は龍二の方へと近づき「なら、俺の相手はお前か」と襲い掛かる。

「俺は参戦してねーぞ」と龍二は拳を避けながら言った。

「お前らの中で生き残った者だけが上へ行けるんだよ」

「俺ら二人以外にも誰か居るのかよ？」

「ああ・・・お前らの大きな仲間もだ！」

一方、何も知らないゴリにも三年の刺客が来ていた。

「岡村剛だな？」

「呼び出してなんじゃお前？」

「勝った方が上へ行ける。言っておくが俺も経験者だ。甘く見るなよ」

「ったく・・・あいつらの仕業か」

屋上では信二達が待機して、しばらく屋上から小さな地域を眺めていた。

「懐かしいな・・・この場所から見る景色は」

「俺達もあいつらみたいに誰が一番強いかって試したことあったな

」

「もう三年か・・・来年には卒業だ・・・」

「あいつらこの階段を上ってくると思っただろうか？」

「来るさ、必ず」

ポツポツと雨粒が空から降ってくる。

やがて空は黒い雲に覆われる。

「やべっ雨降ってきたぞ！」

「とつとと行こうぜ！」

「な、龍二」

「どうした？」

「俺、今日傘持って来てないぜ」

「ハハ・・・俺もだよ」

ぴちゃぴちゃと走ることに足元で水が跳ねる。

拓と龍二は駆け足で屋上へと向かった。

ガチャ・・・

屋上の扉を開けると雨にうたれる二人の背中が見える。

「おーい風邪ひかねーか？」拓は大声で二人を呼んだ。

その声に気付き振り返る。

「ふん・・・やっぱり来たか」信二はにやつと笑う。

拓は体を震わせながら言う。

「とりあえず早く始めようぜ！寒くてたまんねーよ」

「まあそう焦るな。」と首で合図すると、信二の仲間が前へ出た。

それを見て龍二も自然と前へ出た。

「負けんよ・・・龍二」

「おう！」

二人はお互いに構え、雨が地面に落ちる音だけしか聞こえず、静かに始まった。

体を動かすと雨が服や皮膚を弾く。

二人のスピードは速まり、まるでその周辺だけ雨が降ってないようにも見える。

パンツと突然、音が鳴る。さらにもう一度

その音が鳴ると同時に龍二の体が大きく揺れる。

龍二はさっきまでの相手の動きとは違う事に気付き、後ろに下がりに間合いをとった。

相手は突然上下にジャンプし始めた。

・・・ボクシング？

龍二はその動きを見てそう思った。

二人は再び激しくぶつかり合う。

だが、龍二は相手よりもさらに速くボディに一発その後ガードが下がったのを狙い顔面に拳を大きく振りかぶる。

相手は足から崩れ落ち、その場に倒れこんだ。

雨の音と龍二の荒い息が拓と信二の耳に聞こえる。

龍二は元の場所に戻り、拓とハイタッチした。

「やっぱりおめえはつえくな」

「拓・・・負けんじゃねーぞ」

「俺がもし負けたらその時はお前が代わりに取れ！」

「笑えねーよ」

「はは・・・そうか？」

拓はゆつくりと屋上の真ん中へと歩いて行った。

信二は倒れた仲間を担ぎフェンスを背もたれに座らせた。

「ごめん、負けちまった」

「もう喋るな、あとは俺が勝てばいいだけだ」

「勝てよ・・・信二」

「ああ今日は最悪の天気だが最高の景色をまた見せてやるよ」  
信二もゆっくりと拓の方へ向かった。

「いよいよだな」

「ああ、悪いけど俺はお前を倒して天辺取るよ」

「簡単にはその夢叶わせないぜ」

「うおおおおお！！！！！」「おらあああああ！！！！！」

二人はお互いの胸ぐらを掴み叫び合う。

雨はまるで二人の心を表すかのようにさらに激しさを増していく。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7109z/>

---

傷

2011年12月26日00時59分発行